

Title	オーストリア刑法雑誌論文目録
Sub Title	Personen-und Sachregister der österreichischen Zeitschrift für das Strafrecht (1910-1920)
Author	宮沢, 浩一 (Miyazawa, Koichi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1968
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.41, No.7 (1968. 7) ,p.45- 62
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19680715-0045

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

オーストリア刑法雑誌論文目録

宮 沢 浩 一

解 説

一 オーストリア刑法雑誌は、一九一〇年に生まれ、第一次大戦の敗戦とそれに続く混乱のうちに、一九二〇年、第八巻をもつて、その短かい歴史をとじた。第一巻から第六巻までは、各年一巻ずつ発刊されていたが、戦況が不利になるに伴い、第七巻は一九一六年から一八年の前半、第八巻は一九一八年後半から一九二〇年というように、合併号の形で出た。

今日、この余りにも短かい期間しか存続せず、刑法雑誌として、終りをまつとうしたとは思えないこの雑誌をとりあげて紹介する意味はどこにあるのであろうか。

二 オーストリア刑法雑誌の創刊号に、編集責任者、ウィーン大学のアレクサンダー・ロエフラーの発刊の辞がある。それによると、同誌は、刑法の理論においても、立法においても、従来、ドイツの

刑法学に負うところが極めて大きかつたオーストリアが、これまでは逆に、刑法学の発展に対するオーストリアの寄与をはたすために創刊されたのであつて、同誌の存在により、外国の刑事立法者や刑法理論家の関心をオーストリアの研究・実務へいざなうという意図の下に発足した。それとともに、外国の刑法理論の展開、外国、内国の立法の状況を充分に反映させようとするものである。このため、オーストリアの事項については、完全を期し、ドイツその他の外国については、既存の刑法雑誌と競争をしたい、との抱負を述べている。

そして、この雑誌が時代の鏡として、正確に現状を反映するため、一方の側に偏することを避け、いかなる立場をとるにせよ、真摯な研究者の論説をよるこんで掲げたいといつてゐる。

さらに、判例の動向には、特に注意すること、及び立法が実務にどう浸透していつたかにも注意を払う。その扱う研究対象は、刑法・刑事訴訟法及びその他の補助科学であるということなどにも言及

している。

この第一巻の共同編集者には、グライスパツハ(当時プラトハ大
学、後に、ウィーン大学を経てベルリン大学の諸教授を歴任、グロ
ス(グラーツ大学教授)、カール(ベルリン大学教授)、ランマツシュ
イン(ウィーン大学教授)、レンツ(グラーツ大学教授)、リリエンタール(ハ
イデルベルク大学教授)、V・リスト(ベルリン大学教授)、シュート
ス(ウィーン大学教授)等、当時の独・奥の刑法学界を代表する人
人の名前が見えている。

オーストリア刑法雑誌は、この創刊の辞にうたわれたような使命
をはたしたであらうか。

三 同誌の誕生の年は、ドイツ、スイスとともに、同国でも刑法改
正の大事業が発足した重要な時期であつた。ドイツにおけると同様、
オーストリア、スイスは、ともに、前世紀からの刑法改正の動きが
次第に具体化の歩みを速め、一九〇八年にはスイスで、一九〇九年
には、ドイツとオーストリアで、それぞれ刑法改正の諸(予備)草
案が発表され、それをめぐる活発な議論が展開されていた。

発刊の第一巻第一号は、近代刑事立法史の巨人、V・リストとC
・シュトースが、ともに保安・改善処分を論評する論文を寄稿し
て、その発足を祝つた。

当時、オーストリア・ハンガリーという、ハプスブルク家の権勢
をもつて一大帝国を形成していたオーストリアの刑法学の状態は、
この雑誌にもよく現われていて、ハンガリー系と思われる学者や実

務家の寄稿がかなり多い。

オーストリアの刑法学を世界に紹介するという役割は、たしか
に、充分にはたしている。

編集責任者のロエフラーが、縦横の活躍を示したことは当然とし
て、エックスナーやカデチカ等が若い頃の筆のさえを見せている
し、リットラー、レンツ、グロース、特に、グライスパツハやシュ
トースの健筆がはなばなしかつた。

外国の論客も、スイスのデラキー、V・オーバーベック、ドイツ
では、V・リスト、ビルクマイヤー、アジアフエンブルク、リープ
マン、ミッテルマイヤー、ハイムベルガー等が寄稿しているが、我
が国では、ジエームス・ゴルトシュミットの「緊急避難論」が特
に有名である。

内国・外国の立法については、非常に詳細な報告が出て居り、第
一次大戦前後の独語圏の刑事立法の動きを知るのに、貴重な資料を
提供してくれる。但し、一九一四年以降は、立法の大部分が、現在
では、参考となつては困る「戦時刑法」「軍刑法」の立案に割かれ
ている。

同誌の資料的価値は、刑事判例を附録としてかなり組織的に集め
たところにもある。即ち、一九〇九年から一九一五年までに宣告さ
れた最高裁と破毀院の判例七五五件を分載し、重要なものには評釈
をつけ、しかも、各分載ごとに事項索引及び条文索引までつけて
ある。これには、実務家の協力がなされている。

以上、極めて簡単であつたが、オーストリア刑法雑誌が、まこと

に短命であつたにも拘らず、充実した内容の雑誌であつたこと、そして、戦争という不幸な出来事とヨーロッパにおけるオーストリアの国際的地位の後退、それに伴う国力の低下等が、このすぐれた国際的刑法雑誌の運命を絶つたことの説明をしたことにする。

オーストリアの刑法学は、たしかに、余り研究されてはいない。一八〇三年にまで遡ることの出来る、一八五二年公布の刑法典をもち、刑法の体系書としても、例えば、古くは、グラザー、ヘルプスト、ヒュイエ、ヤンカ、イェヌル、近くは、ランマツシュ、シュトース、或いは、ホロウ、マラニウク、カニアク、リットラー、ノヴァコウスキー、ロエダーや最近のブラツグンマーのモノグラフイー等があるのに、ともすれば、ドイツ刑法学の影にかくれてしまつている。

さきに、一九六二年、一九六四年の両草案が齊藤金作教授の主宰される早稲田大学の研究陣によつて邦訳され（刑事基本法令改正資料第五号、第九号）、最近、特に、都立大学の内藤教授の一連の御研究（立法問題としての緊急避難・警察研究三八巻九・一〇号（未完）、立法問題としての正当防衛・判例時報四八八、四九三、四九四、四九七、五〇〇、五〇三号、立法問題としての不真正不作爲犯・判例タイムズ二〇九、二二〇、二二四、二二五号（未完））において、第一次大戦後のオーストリアの刑法改正の動向に関してかなり明らかにされた。若し、今後、補足するとすれば、私の紹介する論文や、或いは立法資料をたんねんに読んで、内藤教授の拓かれた道に沿いつつそれ以前の状態に検討のメスを加えてゆくことであらう。

四 オーストリア刑法学その後の展開を知るには、どうすればよいか。刑法の専門誌ではないが、戦前からのものに、Juristische Blätter と戦後の一般雑誌として、Österreichische Juristenzeitung の二誌があり、Österreichische Zeitschrift für das öffentliche Recht Zeitschrift für Rechtsvergleichung とも、若干、刑事法の論稿が見える。

私共の研究室の資料の充実さからいつて、さし当り、一般雑誌二誌から、刑事法関係の論文目録を作成することは可能であり、カードの段階では、すでに整理は終つた。

五 最後に、同誌の資料的価値からいつて、いかなる部分が、今日、最も重要であるか。

①オーストリア刑法改正に関する論稿がその第一、②次に、オーストリアの少年法改正に関するグライスバッハの論文と、ウィーン法学協会における討論、③そして、第三に、一連の責任に関する議論、に注目すべきものがあると私は考える。

本資料を利用される方々に便利であることを考え、まず、執筆者名別に論文を整理し、分る限り、筆者について紹介をする。

次に、事項ごとに、一括し、その事項にまとめた中では、氏名のABC順で整理し、同一人については、論文発表年度に従つて整理した。

オーストリア刑法学研究のための、ごくわずかの距離の間の粗末な里程標であるにすぎないが、利用していただければ幸である。

資料篇

一人名別目録

Aschaffenburg, Gustav.

当時、ケルン大学教授として、犯罪学の研究の中心的存在であり、たゞ、説明するまでもなごである。

Experimentelle Psychologie und Strafrechtspflege. ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 71 ff.

この論文は、次のような編集者ロエフラーのあとがきがある。
Löfler, A.; Nachwort zu diesem Aufsatz, ebenda, S. 87 ff.

Auer, George.

ブタメント高等裁判所の上席判事である。

Ungarisches Kriegsstrafrecht. ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 17 ff.

Bánbéry, Ruzsem.

ブタメントの検察官から、私講師になつた。その後の消息は不明である。

Die Fachbildung der Gefängnisbeamten. ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 505 ff.

Die Schwurgerichtsreform in Ungarn. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 357 ff. (私講師)

v. Birkmeyer, Karl.

当時、ミュンヘン大学教授であつたビルクマイヤーが、v. リスとの論敵であり、古典派対近代派の論争の中心人物であつたことは、詳しく説明する必要もないであらう。

Gesetz und richterliches Ermessen in den Vorentwürfen zu einem österreichischen und einem deutschen Strafgesetzbuch. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 316 ff.

Brockhausen, Karl.

肩書が、大学教授とだけであるから、よく分らないが、論文の内容から、ウィーン大学の行政法の教授であるかも知れない。

Strafverfügung im Verwaltungsverfahren. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 157 ff.

Delaguis, Ernst.

デラギーは、スイスの生まれであるが、ヘルリン大学のリスト研究室に学び、同じ頃、ラートブルフ、コルラウシュ、ツー・ドーナ、そしてスイスのハフター、オーストリアのリットラーが在籍していた)

一九〇七年、Rehabilitation im Strafrecht, 1907 により、教授資格を取得した。本誌に論文を発表した当時は、ヘルリン大学私講師であつた。一九一四年、フランクフルト大学員外教授、一九一九年ヘルン大学正教授、一九二九年ハンブルク大学教授を経て、一九三四年、再びヘルン大学教授となつた。その後、立法に参画するため、

実務界に入り、ベルン大学の名誉教授となつた。一九五一年三月、死去。

Die Rehabilitation in den Strafgesetzentwürfen Österreichs, des Deutschen Reiches und der Schweiz. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 282 ff.

v. Dolschall, Alfred.

フタハスト大学正教授の肩書をもつが、専攻が何であるかは不明である。

Das neue ungarische Pressgesetz. ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 134 ff.

Exner, Franz.

一九一一年頃まで、ウィーン大学私講師、一九一二年にシエボンウィット大学員外教授、一九一九年にチュービンゲン大学教授となつたエックスナーは、その後、ミュンヘン大学に移り、一九四七年一〇月、同地で死亡した。

Das Prinzip der Schuldhaftung im österreichischen und deutschen Strafgesetzentwurf. ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 405 ff.

Bemerkungen zur Theorie der Wissenschaftlichkeit und des dolus eventualis. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 419 ff.

Was ist Kriminalpolitik? ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 275 ff.

Über Gerechtigkeit im Strafmass. ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 290 ff.

(一九一九年六月一二日に行なつたチュービンゲン大学教授就任講演であり、単行本としても公刊された。)

Graf Gleispach, W.

グライスパッチは、一九一四年にウィーンに移るまでは、フラーハ大学教授であつた。一九一四年にウィーン大学教授となつたが、ナチス党の政權奪取、オーストリー併合の後、ヘルリンに移り、同大学教授として活躍し、ナチス刑法に左祖した。その後の消息は全く不明である。

Randbemerkungen zum Strafgesetzentwurf (Eine Erwiderung auf den Aufsatz von Makarewicz). ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 330 ff.

Der österreichische Strafgesetzentwurf und das Schuldproblem. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 209 ff.

Das Zusammenreffen von strafbaren Handlungen und Strafgesetzen. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 31 ff.

Krieg und Strafrechtsreform. ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 103 ff.

Die Tilgung der Verurteilung. ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 399 ff.

Die Regierungsvorlage über das Jugendstrafrecht. ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 1 ff.

Goldschmidt, James.

ニッヤ系なるが故にナチスに追われ、アルゼンチンで客死した。

スエーデン大学教授ジュー・トマス・ユー・ノ・ト・シ・ホ・ク・マ・グが、刑法・訴訟法の一般理論に限りなく寄与を残したところを以て、この間に多言を要しないであろう。有名な緊急避難論が、本誌で発表され、後に単行本として公刊され、期待可能性論の形成に多大の寄与をしたことは、余りにも有言である。

Die Technik des Besonderen Teiles in dem österreichischen, deutschen und schweizerischen Vortentwurf und in dem deutschen Gegenentwurf. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 221 ff.

Der Notstand, ein Schuldproblem mit Rücksicht auf die Strafgesetzentwürfe Deutschlands, Österreichs und der Schweiz. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 129.

Einige Nachträge zu der Abhandlung „Der Notstand, ein Schuldproblem.“ ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 224 ff.

Gross, Hans.

グラーツの犯罪科学研究所を主宰し、犯罪捜査科学を体系化したグラーツ大学教授グロスの実体刑法に関する論文。

Notwehr und Notstand im österreichischen Strafgesetzentwurf. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 88 ff.

Haberda, Albin.

筆者は、ウィーン大学の法医学教授である。

Gerichtsarztliche Bemerkungen über strafbare Handlungen

gegen Leib und Leben im Vortentwurf zu einem österreichischen Strafgesetzbuche. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 463 ff.

Heimberger, Joseph.

オーストリア大学教授ハイムベルガーは、常盤敏太教授によれば、好人物としての役割の存在であったとか(同・ノートン・ルン、五六頁)。

Die Grenze zwischen Frucht und Menschenleben. ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 163 ff.

v. Hentig, Hans.

ヘンティグは、シチエンで気楽な勉強三昧の生活をしていて、原の論文である。

Die Verwahrung gefährlicher Elemente nach dem Entwurfe eines französischen Irrengesetzes. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 217 ff.

Die Kriminalität der Wertweten und Geschiedenen. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 368 ff.

Hoegel, Hugo.

ホエーゲルは、ウィーンの検事総長であり、本誌の編集者の一人であった。一九〇二年草案の起草は、ランマンシュヤン・トーストと共同で活躍した。

Verzögerte Strafverfahren. ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 1 ff.

Strafrechtsfolgen nach der Novelle vom 15. November 1867.

ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 113 ff.

delikt. ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 311 ff.

v. Isopeseul-Greul, Konst. Ritter.

「**マ・インペン・イン・シュテール**」は、肩書が大学教授であるが、専攻等不明である。Das Wucherstrafrecht, 1906 という著書がある。

「**ヴェルリン**」大学教授（員外教授）の肩書をもった司法省参事官。Die falsche Aussage nach dem österreichischen Vorentwurf. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 307 ff.

Die strafrechtlichen Nebensetze und das Militärstrafrecht. ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 417 ff.

v. Jauregg, Wagner.

ウィーン大学の精神病学の正教授である。マンマフエンブルク月刊誌「**卷六**」オーストリア刑法の責任能力規定について論じている。

「**マンメン**」大学の法医学の教授である。Die strafrechtliche Behandlung des Alkoholmissbrauches nach deutschem und österreichischem Vorentwurf. ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 429 ff.

Der Zurechnungsfähigkeitsparagraf im Strafgesetzentwurf. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 17 ff.

Über Behandlung gemeingefährlicher Geisteskranken. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 70 ff.

Klein, Franz

当時、司法大臣をしていたが、オーストリアの法制度の近代化に重要な寄与をした。Die Zeugenpflicht der an der Herausgabe einer Zeitung beteiligten Personen. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 390 ff.

Kadečka, Ferdinand.

カデツカとよむ人もある。正しくは、カデチカである。後で、ウィーン大学教授になったが、一九一一年には、ウィーンの検察官、その後、司法省参事官をしていた。

v. Krzymuski, Edmund.

Über den Ausdruck „eine Handlung unternehmen“ nach dem Sprachgebrauche des österreichischen Strafgesetzbuches. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 109 ff.

Das Milderungsrecht im österreichischen Vorentwurf. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 175 ff.

Der Begriff des Pressdelikts im deutschösterreichischen Press-

Langer, A.

検事長の肩書をもつた実務家であることの他は、不明である。フ
ンフエンブルク月刊誌二巻に、恩赦と仮釈放につき論じている。

Der Kettenhandel. ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 344 ff.

Übermäßiger Preis oder übermäßiger Gewinn? ÖZStr. 7. Jg.
1916-18, S. 439 ff.

Lederer, Max.

フラーンの陪席判事 Auskultant としての肩書は、全刑法雑誌二六
巻で心理学的な事実の診断、二八巻で北米のフロヴィーシマン制度、
三一巻で保安処分としての断種について書いている。

Fortschritte auf dem Gebiete der Jugendfürsorge. Unter Berü-
cksichtigung der Verhandlungen der Kinderschutzkongresse in
Brüssel und Salzburg. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 264 ff.

Lelewer, Georg.

私講師の肩書をもつが、専攻は軍刑法であるから、フラーンの士
官学校の教官であるのか。

Die österreichisch-ungarische Militärstrafprozess-Entwürfe. ÖZ-
Str. 3. Jg. 1912, S. 121 ff.

Strafrechtliches aus dem neuen Wehrgesetze. ÖZStr. 3. Jg.
1912, S. 342 ff.

Lenz, Adolf.

フラーン大学教授レンツは、グロス教授のあと、フラーン大学犯
罪科学研究所を主宰して来たことは有名である。

Die Aufgaben des Richters nach dem Vorentwurf zu einem
österreichischen Strafgesetzbuche. ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 110 ff.

Die Zurechnungsfähigkeit nach dem Vorentwurf zu einem öster-
reichischen Strafgesetzbuche. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 46 ff.

Die Persönlichkeit des Verbrechens. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 399
ff.

Die sichernde Massnahme. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 283 ff.
Völkerrechtliche Vortragen des Strafrechts in Kriegszeiten.

ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 181 ff.
Das Strafverfahren und der Strafvollzug bei Jugendlichen. ÖZ-
Str. 8. Jg. 1918-20, S. 25 ff.

v. Lenzbrugg, Arnold Madlé.

この著者がいつては、殆んど何も知ることがかない。

Die Stellung der politischen Behörde bei der Bekämpfung der
Preistreibeerei. ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 357 ff.

Liepmann, Moritz.

フンブルク大学教授は、教育刑の主張者として有名なリープマン
といつて、フラーンに説明する必要はあるまい。

Die Einschränkung des Wahrheitsbeweises bei Beleidigungsklagen. ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 205 ff.

v. Liszt, Franz.

檢察官控訴の正確事實の認定に關する不確切の點。

Die „sichernde Massnahmen“ in den drei Vorentwürfen. ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 3 ff.

Löffler, Alexander.

この雜誌の編集責任者として、殆んど全編に健康をなすべし。ヤーン大將の口録録の點。

Die Reform des österreichischen Strafgesetzes.

I. Einleitung. Das ausserordentliche Milderungsrecht. ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 140 ff.

II. Die Anwendung der Einzelhaft. S. 342 ff.

III. Strafe für politische Verbrecher. S. 353 ff.

Die Abgrenzung von Vorsatz und Fahrlässigkeit mit Berücksichtigung des deutschen und österreichischen Vorentwurfes. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 131 ff.

Vorschläge zum österreichischen Strafgesetzentwurf. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 401 ff.

Das Rechtsmittel wegen Anrechnung der Untersuchungshaft. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 413 ff.

Vorschläge zum österreichischen Strafgesetzentwurf. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 45 ff.

Das Rechtsmittel wegen Anrechnung der Untersuchungshaft. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 77 ff.

Die Arbeiten der Kommission des Herrenhauses für Justizgegenstände über die Gesetzesvorlagen zur Reform des Strafrechts. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 117 ff.

Die Anrechnung der Untersuchung. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 230 ff.

Die Beratungen des österreichischen Herrenhauses über die Gesetzesvorlagen zur Reform des Strafrechts. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 232 ff.

Der Entwurf eines Gesetzes betreffend die Auswanderung. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 247 ff.

Das advokatorische Immunitätsrecht in Österreich. Eine erweiterte Buchbesprechung. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 388 ff.

Die Beziehung des Vorsatzes zum Schadensbetrage bei Vermögensdelikten. ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 1 ff.

Zwei bittere Lehren. ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 101 ff.

Das neue österreichische Wucherrecht. ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 290 ff.

Die Verleitung zum Missbrauch der Amtsgewalt. ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 411 ff.

Veruntreuung an eigenen Sachen nach österreichischen Rechte?
ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 429 ff.

Makarewicz, Jurius.

全刑法雑誌一七卷(一八九七年)に、クラカウ大学私講師として、
刑法学における古典主義と実証主義、二五卷に同大学教授として、
オーストリア刑法二一四条の沿革と刑事政策的意義、二六卷に正法
論を書いている。

オーストリア刑法雑誌に執筆した当時は、レンベルク大学教授で
ある。その後のことは、不明である。

Randbemerkungen zum Strafgesetzentwurf ÖZStr. 1. Jg. 1910,
S. 244 ff.

Menzel.

教授の肩書のほか、何も分らない。アシアフェンブルク月刊誌一
九卷に、マクデブルクの警察長官の肩書で淫行媒合罪を論じている
同名の者がいるが、いかなる関係にあらうか。本誌に論文を執筆し
た頃、或いは、ウィーン大学で法史学でも講じていた人であらうか。

Protagnoras als Kriminalist, ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 389 ff.

Mitjaka, August.

ブラーハ大学教授ミジチカ(我が国では、一般に「ミリツカ」と呼んで
いるが、正確ではない)には、私講師論文として、Die Formen der

Strafschuld und ihre gesetzliche Regelung, 1903 244 ff.

Erfolgshaftung und Gefährdung im österreichischen Strafgeset-
zentwurf, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 336 ff.

Zur Frage des zeitlichen Geltungsgebietes des neuen Kriegs-
strafrechts, ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 324 ff.

Die Rekonstruktion der Urteile in Strafsachen, ÖZStr. 7. Jg.
1916-18, S. 318 ff.

Die Verbesserung des Schutzes der Ehre, ÖZStr. 8. Jg. 1818-20,
S. 89 ff.

Mittermaier, Wolfgang.

後に「ハイデルベルク大学に移り、そこで一生を終えたミッテル
マイヤーが、キーセン大学時代に書いた小論である。

Die strafbaren Handlungen gegen die Sittlichkeit im Vorent-
wurf zu einem österreichischen Strafgesetzbuch von 1909, ÖZStr.
2. Jg. 1911, S. 250 ff.

Oferer, Julius.

著者オナーバーの「知るべきならぬ」。

Das soziale Charakterminimum. (Nicht die Tat, sondern der Täter
ist zu bestrafen.) ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 93 ff.

v. Overbeck, Alfred Freiherr.

スイスのフライブルク大学教授である。

Zur Begriffsbestimmung des Vorsatzes im österreichischen Strafgesetzentwurf. ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 297 ff.

Perten, Paul.

この著者については殆んど何も分らない。

Die Teilnahme am Verbrechen in dem österreichischen Strafgesetzentwurf von 1909. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 435 ff.

Pincherle, Emilio.

トリニステで弁護士を開業していたところの他の知られていない。

Die Abstimmung der Geschworenen nach der neuen italienischen Strafprozessordnung. ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 27 ff.

Rittler, Theodor.

一九六七年三月、インスブルックにおいて、九一歳の生涯を終えたりットラーは、オーストリアを代表する刑法学者であった。

Die Regierungsvorlage zur Reform des Strafrechtes. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 326 ff.

Der Grundsatz der Schuldhaftung und objektiven Bedingungen der Strafbarkeit nach deutschem und österreichischem Rechte un-

tersucht. ÖZStr. 8. Jg. 1918-1920, S. 323 ff.

Rosenfeld, Ernst H.

“ドクスター”大学の教授であり、その一生を終えたローランホルトの少壮教授時代の論議である。

Strafensystem und Strafzumessung im Österreichischen und im deutschen Vorentwurf. ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 309 ff.

Die Stellung des Beschuldigten im neuen italienischen Strafverfahren. ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 104 ff.

Pittram, Karl.

筆者メンシラムについては、殆んど何も分らない。
Preisbildung und Recht. ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 199 ff.

Seifert.

著者は、クロンチアの検察員である。
Der Strafvollzug nach dem österreichischen Vorentwurf einer Strafprozessordnung. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 64 ff.

Stöhr.

この著者については、殆んど何も分らない。

Über die Behandlung der Zurechnungsfähigkeit im österreichischen Vorentwurf. ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 34 ff.

Stooss, Karl.

メイス刑法予備草案の起草者として有名な著者のウィーン大学教
授時代の論稿である。

Die sichernde Massnahmen gegen Gemeingefährliche im öster-
reichischen Strafgesetzentwurf. ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 25 ff.

Zur Natur der Fahrlässigkeit ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 5 ff.

Die Geldstrafe im österreichischen Strafgesetzentwurf. ÖZStr.
2. Jg. 1911, S. 12 ff.

Verminderte Zurechnungsfähigkeit und sichernde Massnahmen.
ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 306 ff.

Unmündige und Vollberauschte. Kritische Erörterungen. ÖZStr.
5. Jg. 1914, S. 57 ff.

Was bedeuten die Worte: eine Handlung unternehmen im Sinne
von 8 StGB ? ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 94 ff.

Storch.

シトランド、メーレン(柴クミン)大学刑法教授である。

Die Bestrafung des Versuches in dem österreichischen Vorent-
wurf. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 1 ff.

Die Bemessung der Strafe in den österreichischen Strafgesetzent-
würfen. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 1 ff.

Über die Straflosigkeit der parlamentarischen Berichterstattung.
ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 1 ff.

筆者は、ウィーン宮廷顧問官であり、弁護士の肩書きをもつてい
る。

Die Rechtswirksamkeit der militärgerichtlichen Ehrenstrafen
in Ungarn. ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 269 ff.

Das Geltungsgebiet des materiellen Strafrechts. ÖZStr. 6. Jg.
1915, S. 462 ff.

v. Szöllösy.

筆者はオーストリア・ハンガリーの陸軍法務官である。

Das polizeiliche Strafverfahren in Ungarn. ÖZStr. 3. Jg. 1912,
S. 168 ff.

Tesár, Otokar.

ウィーン大学講師で、憲法裁判所の調査官をかねていた。

Die Rechtsverwirklichung im Strafrecht. ÖZStr. 8. Jg. 1919-20,
S. 368 ff.

Tezner.

この筆名は「ツンツァ」宛てて用いられた。

Zur Frage des Erwerbes der nicht fideikommissarischen erblichen
Herrnhauswürde. ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 98 ff.

II 專断刑罰論

松本・朝野氏

松本朝野氏の論文手本に「ドイツの刑罰制度の歴史」の著
者であることと誤記あり。

C. L. v. Bar + (Löffler) ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 246f.

Karl Binding (Löffler) ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 389.

Karl Binding + (Löffler) ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 423 ff.

Karl v. Birkmeyer + (Löffler) ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 419 ff.

Hans Gross (Gleispach) ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 299 f.

Georg Jellinek (Löffler) ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 1 f.

Josef Kohler (Löffler) ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 417 f.

H. Kriegsmann + ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 267.

Heinrich Lammasch + (Gleispach) ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 415 f.

Ferdinand Leutner + (Löffler) ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 421 f.

Franz v. Liszt (Löffler) ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 129.

Franz v. Liszt + (Löffler) ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 411 ff.

R. Löning + (Löffler) ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 246.

A. Martowich + ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 268.

Heinrich Reichler + (Löffler) ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 3 f.

Josef Rosenblatt (Löffler) ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 295 f.

Alfred Schöber + (Rittler) ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 293.

Zur siebzehnten Wiederkehr des Geburtstags von Karl Stooss
(Gleispach) ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 287 f.

v. Szöllösy + (Maschka) ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 101 f.

E. R. v. Ullmann + (Löffler) ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 107.

Josef Unger + (Löffler) ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 105 f.

Wach (Löffler) ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 245.

刑法典第一編第四編の二つは、法の精神を以てする。

Menzel, Protagoras als Kriminalist. ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 389 ff.

Offener, Das soziale Charakterminimum. (Nicht die Tat, sondern

der Täter ist zu bestrafen) ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 93 ff.

Löffler, Zwei bittere Lehren. ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 101 ff. (キ

ーケルトン博士の暗殺と國權の守護)

キケルトンの刑法及び政府草案に關する論文。

Makarowicz, Randbemerkungen zum Strafgesetzentwurf. ÖZStr.

1. Jg. 1910, S. 244 ff.

Gleispach, Randbemerkungen zum Strafgesetzentwurf. (Eine

Erwiderung auf den Aufsatz von Makarowicz) ÖZStr. 1. Jg. 1910,

S. 330 ff.

Löffler, Die Reform des österreichischen Strafgesetzes.

I. Einleitung. Das ausserordentliche Milderungsrecht. ÖZStr. 1.

Jg. 1910, S. 140 ff.

II. Die Anwendung der Einzelhaft, ebenda. S. 342 ff.

III. Strafe für politische Verbrechen, ebenda. S. 353 ff.

Ders., Vorschläge zum österreichischen Strafgesetzentwurfe. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 401 ff. u. 4. Jg. 1913, S. 45 ff.

Ders., Die Arbeiten der Kommission des Herrenhauses für Justizgegenstände über die Gesetzesvorlagen zur Reform des Strafrechts. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 117 ff.

Ders., Die Beratungen des österreichischen Herrenhauses über die Gesetzesvorlagen zur Reform des Strafrechts. ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 232 ff.

Ritter, Die Regierungsvorlage zur Reform des Strafrechts. ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 326 ff.

世界兵隊(懲罰兵隊) 軍隊兵隊 及び 海軍兵隊 及び 陸軍兵隊 及び 海軍兵隊 及び 陸軍兵隊

Auer, Ungarisches Kriegsstrafrecht, ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 17 ff. Gleispach, Krieg und Strafrechtsreform, ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 103 ff.

v. Isopescu-Greucil, Die strafrechtlichen Nebengesetze und das Militärstrafrecht, ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 417 ff.

Lelewer, Die österreich-ungarische Militärstrafprozess-Entwürfe, ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 121 ff.

Ders., Strafrechtliches aus dem neuen Wehrgesetze, ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 342 ff.

Lenz, Völkerrechtliche Vorfälle des Strafrechts in Kriegszeiten.

ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 181 ff. Szilágyi, Die Rechtswirksamkeit der militärgerichtlichen Ehrenstrafen in Ungarn, ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 269 ff.

Langer, Übermäßiger Preis oder übermäßiger Gewinn? ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 439 ff.

v. Lenzbrugg, Die Stellung der politischen Behörde bei der Bekämpfung der Preistreiberei, ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 357 ff. Löffler, Das neue österreichische Wucherrecht, ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 290 ff.

Prüßmann, Preisbildung und Recht, ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 199 ff. Diskussion über Preisbildung und Recht in der Wiener Juristischen Gesellschaft, ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 217 ff.

v. Dolleschall, Das neue ungarische Pressgesetz, ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 134 ff. Kadetka, Der Begriff des Pressdelikts im deutschösterreichischen Pressdelikt, ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 311 ff.

Brockhausen, Strafverfügung im Verwaltungsstrafverfahren, ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 157 ff.

世界兵隊 及び 陸軍兵隊

Lederer, Fortschritte auf dem Gebiete der Jugendfürsorge. Unter Berücksichtigung der Verhandlungen der Kinderschutzkongresse in Brüssel und Salzburg, ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 264 ff.

Glaspach, Die Regierungsvorlage über das Jugendstrafrecht, ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 1 ff.

Lenz, Das Strafverfahren und der Strafvollzug bei Jugendlichen, ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 25 ff.

Diskussion über das Jugendstrafrecht in der Wiener Juristischen Gesellschaft, ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 57 ff.

泉監部・原典研究部送の論文に於ての要約である。

Aschaffenburg, Experimentelle Psychologie und Strafrechtspflege, ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 71 ff.

、Löffler, Nachwort zu diesem Aufsatz (Aufsatz von Aschaffenburg), ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 87 ff.

Exner, Was ist Kriminalpolitik? ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 275 ff.
v. Hentig, Die Kriminalität der Verwirrten und Geschiedenen, ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 368 ff.

Lenz, Die Persönlichkeit des Verbrechens, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 399 ff.

刑法総則をテーマとする論稿を、通常の刑法総論の体系に従って整理すると次の通りである。

〈適用領域〉

Miticka, Zur Frage des zeitlichen Geltungsgebiets des neuen Kriegsstrafrechts, ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 324 ff.

オーストリア刑法雑誌論文目録

Szilgyi, Das Geltungsgebiet des materiellen Strafrechts, ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 462 ff.

〈罪體論〉

v. Krzymuski, Über den Ausdruck eine Handlung unternehmen nach dem Sprachgebrauche des österreichischen Strafgesetzbuches, ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 109 ff.

Stooss, Was bedeuten die Worte: eine Handlung unternehmen im Sinne von 8 StGB? ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 94 ff.

〈出刑総論・懲罰理論〉

Kadečka, Das Milderungsrecht im österreichischen Vorentwurf, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 175 ff.

Goldschmidt, Der Notstand, ein Schuldproblem. Mit Rücksicht auf die Strafgesetzentwürfe Deutschlands, Österreichs und der Schweiz, ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 129 ff.

Goldschmidt, Einige Nachträge zu der Abhandlung „Der Notstand, ein Schuldproblem,“ ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 224 ff.

Gross, Notwehr und Notstand im österreichischen Strafgesetzentwurf, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 88 ff.

責任論——一般

Exner, Das Prinzip der Schuldhaftung im österreichischen und deutschen Strafgesetzentwurf, ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 405 ff.

Rittler, Der Grundsatz der Schuldhaftung und die objektiven

五九 (1043)

Bedingungen der Strafbarkeit nach deutschem und österreichischem Rechte untersucht, ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 323 ff.

Exner, Bemerkungen zur Theorie der Wesentlichkeit und des dolus eventualis, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 419 ff.

Gleispach, Der österreichische Strafgesetzentwurf und das Schuldproblem, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 209 ff.

Mitficka, Erfolgshaftung und Gefährdung im österreichischen Strafgesetzentwurf, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 333 ff.

責任—故意・過失

Löffler, Die Abgrenzung von Vorsatz und Fahrlässigkeit mit Berücksichtigung des deutschen und österreichischen Vorentwurfs, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 131 ff.

v. Overbeck, Zur Begriffsbestimmung des Vorsatzes im österreichischen Strafgesetzentwurf, ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 297 ff.

Stooss, Zur Natur der Fahrlässigkeit, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 5 ff.

責任能力

v. Jauregg, Der Zurechnungsfähigkeitsparagraf im Strafgesetzentwurf, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 17 ff.

Ders., Über Behandlung gemeingefährlicher Geisteskranker, ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 70 ff.

Lenz, Die Zurechnungsfähigkeit nach dem Vorentwurf zu einem

österreichischen Strafgesetzbuche, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 46 ff.

Stähr, Über die Behandlung der Zurechnungsfähigkeit im österreichischen Vorentwurf, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 34 ff.

Stooss, Verminderte Zurechnungsfähigkeit und sichernde Massnahme, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 306 ff.

Ders., Unmündige und Vollberauschte. Kritische Erörterungen, ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 57 ff.

Kitzinger, Die strafrechtliche Behandlung des Alkoholmissbrauches nach deutschem und österreichischem Vorentwurf, ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 429 ff.

Diskussion über die Frage der Zurechnungsfähigkeit, abgehalten in der Österreichischen Kriminalistischen Vereinigung am 7. und 10. November 1910, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 59 ff.

米瀬・米沢

Storch, Die Bestrafung des Versuches in dem österreichischen Vorentwurf, ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 1 ff.

Perten, Die Teilnahme am Verbrechen in dem österreichischen und dem deutschen Strafgesetzentwurf von 1909, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 435 ff.

權限と犯罪

Löffler, Das ad vokatörise Immunitätsrechte in Österreich. Eine

erweiterte Buchbesprechung, ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 388 ff.

Storch, Über die Straflosigkeit der parlamentarischen Berichterstattung, ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 1 ff.

刑罰・処刑 (重刑ヤシロシ條條ノ記號)

Stooss, Die Geldstrafe im österreichischen Strafgesetzentwurf, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 12 ff.

v. Hentig, Verwahrung gefährlicher Elemente nach dem Entwurfe eines französischen Irrengesetzes, ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 217 ff.

Lenz, Die sichernde Massnahme, ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 283 ff.
v. Liszt, Die „sichernde Massnahme“ in den drei Vorentwürfen, ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 3 ff.

Stooss, Die sichernde Massnahmen gegen Gemeingefährliche im

österreichischen Strafgesetzentwurf, ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 25 ff.

Delaguis, Die Rehabilitation in den Strafgesetzentwürfen Österreichs des Deutschen Reiches und der Schweiz, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 282 ff.

Geispach, Das Zusammenreffen von strafbaren Handlungen und

Strafgesetzen, ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 31 ff.

Tesar, Die Rechtsverwirklichung im Strafrecht, ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 368 ff.

v. Birkmeyer, Gesetz und richterliches Ermessen in den Vorentwürfen zu einem österreichischen und einem deutschen Straf-

gesetzbuch, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 316 ff.

Exner, Über Gerechtigkeit im Strafmas, ÖZStr. 8. Jg. 1918, 1918-20, S. 290 ff.

Lenz, Die Aufgaben des Richters nach dem Vorentwurf zu einem österreichischen Strafgesetzbuche, ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 110 ff.

Storch, Die Bemessung der Strafe in den österreichischen Strafgesetzentwürfen, ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 1 ff.

Höegel, Strafrechtsfolgen nach der Novelle vom 15. November 1867, ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 113 ff.

Rosenfeld, Strafsystem und Strafzumessung im österreichischen und im deutschen Vorentwurf, ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 309 ff.

行刑

Bämbéry, Die Fachbildung der Gefängnisbeamten, ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 505 ff.

Seifert, Der Strafvollzug nach dem österreichischen Vorentwurf einer Strafprozessordnung, ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 64 ff.

刑法中ノ罰金ノ適用ノ條條ノ記號

Goldschmidt, Die Technik des Besonderen Teils in dem österreichischen, deutschen und schweizerischen Vorentwurf und in dem deutschen Gegenentwurf, ÖZStr. 3. Jg. 1912, 221 ff.

Harberda, Gerichtärztliche Bemerkungen über strafbare Handlun-

gen gegen Leib und Leben im Vorentwurf zu einem österreichischen Strafgesetzbuche, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 463 ff.

Heimberger, Die Grenze zwischen Frucht und Menschenleben,

ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 163 ff.

Kahl, Die falsche Aussage nach dem österreichischen Vorentwurf, ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 307 ff.

Langer, Der Kettenhandel, ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 344 ff.

Löffler, Der Entwurf eines Gesetzes betreffend die Auswanderung, ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 247 ff.

Ders., Die Beziehung des Vorsatzes zum Schadensbetrage bei Vermögensdelikten, ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 1 ff.

Ders., Die Verletzung zum Missbrauch der Amtsgewalt, ÖZStr.

7. Jg. 1916-18, S. 411 ff.

Ders., Veruntreuung an eigenen Sachen nach österreichischen Rechte? ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 429 ff.

Mitfiska, Die Verbesserung des Schutzes der Ehre, ÖZStr. 8. Jg. 1918-20, S. 89 ff.

Mittermaier, Die strafbaren Handlungen gegen die Sittlichkeit im Vorentwurf zu einem österreichischen Strafgesetzbuch von 1909, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 250 ff.

采鑑考

Tezner, Zur Frage des Erwerbes der nicht fideikommissarischen

erblichen Herrenhauswürde, ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 98 ff.

Bánbery, Die Schwurgerichtsreform in Ungarn, ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 357 ff.

Gleispach, Die Tilgung der Verurteilung, ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 399 ff.

Hoegel, Vierzig Jahre Strafverfahren, ÖZStr. 6. Jg. 1915, S. 1 ff.

Klein, Die Zeugnispflicht der an der Herausgabe einer Zeitung beteiligten Personen, ÖZStr. 2. Jg. 1911, S. 390 ff.

Liepmann, Die Einschränkung des Wahrheitsbeweises bei Belaidigungsklagen, ÖZStr. 1. Jg. 1910, S. 205 ff.

Löffler, Das Rechtsmittel wegen Anrechnung der Untersuchungshaft, ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 413 ff.

Löffler, wie oben, 4. Jg. 1913, S. 77 ff.

Löffler, Die Anrechnung der Untersuchung, ÖZStr. 4. Jg. 1913, S. 230 ff.

Mitfiska, Die Rekonstruktion der Urteile in Strafsachen, ÖZStr. 7. Jg. 1916-18, S. 318 ff.

Pincherle, Die Abstimmung der Geschworenen nach der neuen italienischen Strafprozessordnung, ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 27 ff.

Rosenfeld, Die Stellung des Beschuldigten im neuen italienischen Strafverfahren, ÖZStr. 5. Jg. 1914, S. 104 ff.

v. Szöllösy, Das polizeiliche Strafverfahren in Ungarn, ÖZStr. 3. Jg. 1912, S. 168 ff.